

ものづくりが切り開く新たな世界

こまつの歴史

市内では八日市地方遺跡から鉄斧の柄や鉄製ヤリガンナ[※]などが出土しており、今から約2300年前の弥生時代中期には、鉄製品が使われていたことが明らかになっています。

これらの鉄製品は、どのようにして当地に届いたのでしょうか。

問い合わせ

埋蔵文化財センター

☎47・5713

鉄の伝来

弥生時代、鉄は大陸から海を渡り日本列島に伝わりました。当初は、輸入した鉄素材や鉄製品が使われていましたが、古墳時代後期になると製鉄技術が伝わり、日本でも鉄づくりが始まります。

製鉄のはじまり



▲林遺跡の製鉄炉跡

品をはじめとする、ものづくりに関わる技術者が生活していたと考えられています。

南加賀では飛鳥時代に入ると、南部地区の山間部に高温で砂鉄を加熱し鉄を生産する製鉄炉と、燃料となる木炭を生産する炭窯が築かれ、鉄づくりが始まります。それと連動するように、突如として月津台地にもものづくりを営む村々が登場します。これらの村には鉄製

製鉄地帯への発展

山間部で生産された鉄素材は、台地上の村へと運ばれ、鉄製品に加工されました。額見町遺跡では、鉄の生産や鉄製品の加工に関わる様々な出土品が見つかっており、南部地区にて鉄素材の生産から製品の加工、出荷まで行われていたと考えられています。

この南加賀の製鉄は、新たな技術を導入しながら平安時代の終わり頃まで約500年にもわたって続き、北陸有数の製鉄地帯として操業していました。



▲額見町遺跡鍛冶関連遺物

※：ヤリのように刃が両側にある、木材を加工する道具



企画展

古代こまつのものづくり

—製鉄編—

会 期 9月27日(土)～12月7日(日)

ところ 加賀国府ものがたり館



▲林遺跡出土大鉄塊
(県埋蔵文化財センター所蔵)